

あおい通信 第72号

世評・時評

日本は今、大きな岐路に立っています。これから震災後の復興の道を歩むことになりま

が、果たして、これまで通りの日本に戻るべきなのかどうか、今一度考えるべき時期なのではないでしょうか。

最近の日本は、「他人に対して無関心、無関係」という考え方が支配していったように感じています。しかし、この大震災で多くの人が被災者も含めた「自分以外の誰か」のことを考えるようになったのではないで

しょうか。ともすれば希薄になりがちだった人間らしい感情や、人々とのつながりが改めて見直される機会になりました。

外国の人たちは、大震災後の日本人の秩序だった行動に驚き、褒めて呉れています。こういうことを今だけで終わらせてはいけません。日本はこれからより素晴らしい国を目指してステップアップしていかなければなりません。いつまでも皆が自分以外の誰かや社会を思いやる今の気持ち

を忘れないようにすれ

本郷と言えば、東大ですね。東大と言えば、安田講堂（右）そして、赤門（下）



写真・文 七海邦夫

東京江戸散歩

その参〇 本郷界限 ①

小石川と上野を結び東西に走る春日通りの北側に位置する本郷四〜七丁目、此処は東が不忍池、西は白山通りに挟まれる地域である。この地域の真ん中を通るのが本郷通り（国道十七号）でかつての中山道である。

本郷通りと春日通りが交差する本郷三丁目江戸時代に市内と市外の境目であり、本郷三丁目交差点から北に走る坂を順に「見返り坂」「見送り坂」と言う。江戸時代、市外へ追放される罪人あるいは旅人を、ここで見送ったり振り返ったりしながら別れたのでこの名

がついたと言われる。ここを越えれば、市中の賑いが遠くなったのである。江戸幕府にとり、ここは戦略上重要な場所であった。今の東大農学部前は森川宿と呼ばれ、街道の分岐点で、ここで中山道と岩槻街道に分かれ、森川追分（本郷追分）ともいわれた。本田、阿部、小笠原、前田などの旗本や大名屋敷が配置され、東北や関東に、にらみを

きかした。本郷と言えば東京大学の街として有名である。現在、東京大学は本郷七丁目のほとんどの地域を占めている、そして大学の両側に位置する本郷四〜六丁目界隈は、まさに東京大学前町として発展してきた。東大の全身は、本郷の隣の湯島にあった

あおい俳壇

地覆のひまわり武蔵野の万葉の春かな
予料練の歌なにかしき花回かな

河角 進

境洋間（うら）の春の光をみし林檎園
春耕の土の底に花芽をみよしのひ

貞子

被災地の瓦礫の下より花すめれ
補聴器を（）にかけると春の牛紙

廣子

大津波喰もむわし万葉節 アイプリルル

匡子

昌平坂学問所である。これが開成所となり、明治八年（1875）、元加賀藩前田家の広大な上屋敷に起工し、明治十年（1877）、東京帝国大学として発足した。東大構内にある赤門と三四郎池に、当時の前田家上屋敷の面影が残る。以降、この町は東大の教員、学生さらには文人が住むアカデミックな町として発展してきた。旧森下町には学生目当ての下宿も多く、今でも、その面影を残す木造アパートが存在する。

吉野 波な

いった下宿屋を転々とし、生活が少し楽になった明治四二年（1909）、本郷二丁目の下宿「喜之床」近くの菊富士ホテルには近くの菊富士ホテルには、谷崎潤一郎、広津和郎、尾崎士郎、宇野浩二、宮本百合子、竹久夢二などが滞在し創作に励んだ。本郷の北に位置する西片も、夏目漱石、長岡半太郎、滝廉太郎など、文化人や学者が多く住んでいた。（続く）

◆編集委員会より

「あおい通信」は、皆様からの原稿を募集しています。担当飯島迄お申し出ください。

餅話

本田 トミ子

今日、誕生日のお祝いをするのは珍しいことではありませんが、昔から続いてきた習慣のように思いがちですが、わが国で広く定着したのは戦後になってからのことと、その歴史は決して古くありません。

それまでは、いわゆる数え年で、年を取るのにお正月という考え方が浸透してました。元日が皆の誕生日だったようなものでした。そんな時代にあっても、初めての誕生日だけは例外で、盛大なお祝いが催されました。地方によっては、今日

もその伝統的なお祝いに欠かせないのが一升のお餅です。米の一升と人の一生をかけて、子供が将来ずっと食べ物に不自由しないことや、生涯に亘って健康に恵まれることを餅に託して祈り、その一升餅を一歳になった子に背負わせます。



餅は空腹を満たす為の食事でありません。そ

れは神様のお供えに用いられる不思議な力を持った神聖な食べ物です。神武天皇が東征に出発する時、人々は餅を搗いて武運を祈ったといわれています。餅はそれ程古くから日本人と共にあるのです。

人々は、冠婚葬祭や、人生の節目々々に：お正月の鏡餅、ひな祭りの菱餅、建前の小判餅、お祝いの鳥の子餅など：神様に餅を供え、それを頂いて命の充電をし、心して生きてきたのです。



鏡餅のように、まん丸の心で日々を過ごせたらと願っています。

ふんわり雪割餅 霜降餅 今かつ子



十年前、都会の暮らしに慣れて残りの半生を：と子供のような単純な思いで息子を頼りに上京し、今に至っています。よく言う、「井戸の中のビッキ(蛙)」で、世間知らずの私でした。今思えば、田舎

もよいところが一杯あったのです。山や川があり、自然は豊かで面白く、また厳しい日々。幼少の食糧難の頃は山に行き、多種の山菜を集めたり、川でザッコ(雑魚)を獲

ては、子供ながらも皆と和気あいあいと暮しました。

雪解けと共に自然は強い命の芽を出し、生きるもの達の命を一年繋ぎます。夏には、川でザッコやカジカを捕り、冬に備えて保存します。次いで稔りの秋、そして間違いないく巡ってくる一面の銀世界の冬。都会では味わう事の出来ない自然の営みの繰返しが、四季の様々な思い出が、走馬灯

川 湧泉
腹式で 4・7・8・ の深呼吸
入浴を 思い出させる タオル体操
右側が ロダンになれない 考える人
一日が 終わった気がする マット体操
伴奏が ないと淋しい 今日の歌
本編 七海邦夫
三四郎 一匹のどぜう 現れず
一葉の お陰で伊勢屋 名を残す
井頭 権兵衛
花吹雪 嫌な事など 吹き飛ばせ

のように駆け巡ります。その思い出の一つ：冬は本当に辛く、大変でした。朝起きると、玄関は夜の間に降った1mぐらいの雪にふさがれ、雪かきを怠けると出入りも困るくらい。屋根にはズッシリと雪のボシが。毎日毎日が雪との格闘です。でも、晴天になると、スキー・ソリ乗り。かまくらつくりの楽しみが待っていました。



屋根の雪おろし

今は昔と違い、ブル(ブルドーザー)除雪車がひっきりなしに走りまわり、若者は職を求めて家を出て行き、自然の営みに飲びを見出す人もメッキリ減って淋しい土地になってしまい、心が痛みます。山菜やイチゴをスーパーで目にする、今更ながら懐かしい故郷の原風景が目に見え、懐かしさがこみ上げてきます。

雪割れて
パック(ふんわり)
顔出し微笑ふくむ



雑記帳
健気やな
季節(とき)を忘れず
(じぶ)咲く
満開のこぶし



満開のこぶし

中国の古典「莊子」の格言に「聖人に夢無し」とある。聖徳のある人には心には煩いがなく安眠して夢をみない、と。夢を眠りの友として毎夜の愉しみにしている身

政治も経済も疲弊して鬱々とする昨今、選手とコーチの一人二役を演じてわが身にスパルタ指導を試みるのも元氣回復の一策だろう。(ヨツチ)
「原発は安全でクリーンなエネルギー」という宣伝に騙されてきた。「想定外」の地震と津波だったから、311の惨事は「私達に責任はありません」と弁解する彼等。同格(同じ穴の貉と読んでほしい)は、つい先日まで「年金は安全・安心です」と語っていた

は「俗人」のお墨付きをもらったような気分だが、心配事が夢にあらわれるのはしばしば経験することと、格言を頭から否定もできない。スポーツの選手などは試合前、夢の中で苦戦することもあ



荘子像